

第80回麻布獣医学会 一般講演10

腎生検によって診断された猫の糸球体腎炎

代田 欣二¹, 浅野 智子¹, 配島 淳子², 井上 薫³, 荻原喜久美⁴¹麻布大学附置生物科学総合研究所, ²現財団法人残留農薬研究所,
³現国立医薬品食品衛生研究所, ⁴麻布大学環境保健学部・環境病理学研究室

腎不全や蛋白尿を示す動物では、原疾患が糸球体腎炎である場合が少なくないと思われるが、ヒトのように腎生検による診断やその後の追跡が殆ど行われていない。本発表では、蛋白尿を示し、ネフローゼ症候群や腎不全を示した猫の腎生検3例を紹介する。

症例1：日本猫，2歳，雄。下痢，元気消失。透明腹水貯留，蛋白尿（膀胱尿：2,110 mg/dL）を確認。血液検査では低アルブミン血症：1.83 g/dLと高窒素血症（BUN: 81.4 mg/dL, Cre: 2.59 mg/dL）。糸球体疾患を疑い腎皮質の開放生検を実施。腎糸球体に多量のIgG, C3の沈着を確認し，光顕・電顕的に犬や猫では報告のない非典型的MPGN/MPGN, Type IIIと診断。

症例2：日本猫，9ヶ月，雄。元気食欲の低下，四肢の浮腫，下痢，低蛋白血症（TP: 3.0 g/dL），貧血（PCV: 20%），高窒素血症（BUN: 79 mg/dL, Cre: 1.8 mg/dL），高度蛋白尿（1583 mg/dL），尿蛋白・Cre比：25.7，尿沈査で硝子円柱を確認。経皮的腎生検

で典型的なMPGN, Type Iと診断，免疫組織学的に糸球体内にIgG, C3の多量の沈着を認めた。

症例3：日本猫，3歳，雌。軽度の呼吸困難，元気消失。胸水の貯留，軽度の腎機能低下（BUN: 35.4 mg/dL, Cre: 1.9 mg/dL），低蛋白血症（3.8 g/dL），低アルブミン血症（1.3 g/dL），高コレステロール血症（206 mg/dL），高度蛋白尿を確認。経皮的腎生検を行い増殖性糸球体腎炎と診断。糸球体係締壁とボーマン囊の癒着が頻発し，IgG, C3が多量に沈着しており進行性と考えた。約10ヶ月後に高窒素血症が進行し，死亡。剖検で尿毒症，腎性上皮小体機能亢進症を示唆する全身病変を確認。腎糸球体は殆ど硬化し，間質線維化・細胞浸潤も著しく（硬化性糸球体腎炎），この腎臓の組織像から原発病変を推測する事は困難と考えられた。

（症例をご提供下さった，町田動物病院・町田晴市先生，大室獣医科医院・大室農夫先生，東京大学・塚本篤士先生，大野耕一先生に深謝いたします。）